立命館文學　第五卷　第四號

元和版下學集攷

岡田希雄

一

室町時代に鼎足の形でよく行はれた三種の國語關係の辭書、卽ち節用集・和玉篇・下學集の開版狀態を見るに、色葉分類と意義分類とを併用した節用集――其の原本が出來たのは、文安元年の下學集よりは後、文明六年よりは前であると認められる――は、

天正十八年本　二卷二册、天正十八年の刊本であるか何うかは疑問である、貴重影本刊行會の複製本がある、其の解說は自分が執筆したのだが其の解說を參照せられたい。

饅頭屋本　美濃半截横本一卷一册、奈良の饅頭屋林宗二の刊行したものと傳へられて居るが證據は無く、刊年は全く不詳にして、慶長以前のものと云はれて居る。正宗敦夫氏の複製本がある。

を始めとして、慶長に入ると、

慶長二年平井版易林本　二卷二册、平井休與開版本であるが、慶長二年と云ふのは、易林が跋文を加へた年

であるから、刊記とは認め難く、開版はも少し後であらうと云ふ説がある。不完全だが古典全集の凸版複製本がある。

覆易林本　二卷二册、右の易林本を版下として冠彫で開版したもので、刊行年月は判らぬが、慶長十五年以前である。

無刊記行草本　二卷二册、平假名附訓本、大體易林本と同じ。

慶長十五年二月小山仁右衛門版　二卷二册、覆易林本に基いて開版せられたもの。

慶長十五年二月壽閑版　二卷二册、行草本。

慶長十六年九月版二行本　二卷二册、行草體の左傍に、楷體を小書したもので、二行本である。壽閑本も本書も易林本系である。

等これらの諸本の解説や標本寫眞は橋本博士の古本節用集の研究、川瀬氏の善本影譜甲戌第九輯に見える が出で、又元和中には五年十二月に源太郎版横本二册が刊行せられた。次ぎに部首分類式の和玉篇は――鎌倉期の本朝書籍目錄の假名玉篇三卷は、和玉篇の一種であつたと考へられる、――は

龍龕手鑑式活字和玉篇　三卷三册、部首が龍龕手鑑のと同じ小異あり であるから、斯く呼ぶのである、活字版だから三種又は四種の異版がある。慶長日件錄の慶長九年五月二十五日條所見の一字板和玉篇に擬するのが普通である。古典全集第五期に收められたが、餘りに小さく、又不鮮明で實用に不向である。

慶長十年十二月夢梅本玉篇　三卷五册、慶長十年十二月と云ふのは夢梅(易林本節用集の易林のこと)が識語

を加へた年月だが、大體同時刊行かと想像せられる。本文は活字和玉篇とは全く異る。

慶長十年正月東井叟本倭玉篇　三卷、此の本和田氏の訪書餘錄に不完全な說明が見えるだけで、實物の所在も不明だから性質は判らぬ、和田氏によると以下の倭玉篇と同じ本文であるかの如くである。

慶長十五年二月版倭玉篇(初刊本)　三卷三册、

同　右(無刊所本)　三卷三册、刊記は初刊本と同じだが、初刊本の冠彫だから十五年二月の開版では無い、それよりも後れたものである。

慶長十五年二月倭玉篇(無刊所異版本)　三卷三册、岡井博士指摘のもので、自分はまだ見て居ない。

慶長十八年十一月版倭玉篇(雙刊記本)　訪書餘錄所見のもので說明が無いから性質は判りかねるが、右の初刊本か無刊所本かの冠彫開版であるらしい。十五年の刊記と十八年の刊記とを併記して居るのが特長である。

慶長十八年十一月版倭玉篇(單刊記本)　三卷三册、十八年の刊記しか無い。

等が慶長年中に出で、元和と成ると、所謂元和版縮刷横本倭玉篇三卷三册が出たらしいが、意義分類體の文安元年の下學集の刊行は、最も後れて漸く元和三年四月に上梓せられたのである。何故下學集の刊行が後れたか。或は偶然であつたかも知れないが、下學集の組織が、辭書としては最も幼稚不完全な不便な意義分類體である事、しかして又意義分類體と云へば、節用集が色葉分類と意義分類とを併用して居り、ために純粹の意義分類體辭書の要求も緩和せられる筈であつた事、下學集の註文は全部漢文であり、節用集・和玉篇に比べると、高級であり、一般向きの點では節用集和玉篇より劣つて居た筈である事などを考慮すると、下學集刊行の後れた事情は大體理解できると思ふ。しか

して下學集刊行の後れた事情はやがて又、德川期に於いて、終始、節用集や節用集の刊行が隆盛を極めたに反し、下學集の刊行が甚だしく少くして、終には世俗用辭書としての勢力を全く失ひ、顧られなくなつてしまつた理由でもあらうと考へられる。

二

元和三年四月版の下學集美濃版二卷二册又は合本一册は、今日ではやはり希覯本と成つては居るが、先づ數は多い方にて、古書販賣目錄や古書卽賣會場で、見うける事も珍しくは無い。しかして辭書類の蒐集家龜田次郎氏は、「刊本下學集について」と云ふ有益な文（立命館文學昭和十年四月號所載）の中で、各種の刊本下學集を列記せられたが、元和版に關しては、初刷と其の後刷本二種とを擧げ

イ 下卷末の裏頁の最末行（頁七行だから第七行に當る）に「元和三年丁巳孟夏吉日梓焉」とある本が初刷である。（龜田氏の文には乙巳とあるが訂正した）

ロ 右の刊行年月の一行を一行半程、前へ進め、其の次行に「行書」で「杉田良庵玄與開板」と、開板者の名を加へた本は再刷本である。

ハ 右の刊行年月や開板者名を全く削り去りし本は三刷本である。

とせられた（右のイロハ各本の說明は龜田氏の文其のまゝでは無い）元和版に關する記述としては是れ程詳しいものはあるまい。

さて此の元和版は、今云つたやうに古書卽賣會などでちよい〳〵見受けるが、自分は別段に刊記などに注意しても見ず、又見る價値ありとも考へず、自家所藏の摺刷の惡い本の刊記が、右のイロハの何れとも異り「元和三年丁巳孟夏」（此の行の位置はロの刊行年月の行と一致す）と云ふのであるにしても、同版で摺刷時が異るにつれ刊記に小異が生ずるのは普通だから、

是亦何等注意もせなかつた。要するに元和版に二版あると云ふやうな事を考へても見ないから、刊記が少々違うても何とも思はず、元和版と云へば前摺後摺の相異があるのだ位に後に思うて居たのであつた。

ところが自分は最近二月末に至り、神道集、琉球神道記、說經節正本集第一、二、室町時代物語集第一、物語草子目錄等の校訂刊行者たる横山重氏より、下學集には元和二年版がある由を敎へられ、續いて氏の愛藏せられる二年版と三年版とを拜借して、下學集元和版に關する自分の智識の不足を知つたので、こゝに自家の備忘の爲めに此の一文を物するのである。

さて自分の知つた邊家的新事實とは、元和三年版下學集には、初版と其の冠彫再版とがあると云ふ事である。

三

事の順序として横山氏所藏の下學集二部を解說する。一は初版で順宗と云ふ人（此の人、僧であつたらしいから音讀する）が所藏して居た二册本（便宜上順宗本と呼ぶ）、他は再版一册本（場合によつては三千坊本と呼ぶ）であるが、都合上、後者を先きに述べる。

先づ再版一册本は、藍表紙を有するが、是れは明らかに、元表紙では無い。一册と云ふのも後人の合綴したものである事は虫痕の不連續にて判る。本の寸法は、順宗本や家藏本、家藏零本に比べると少し小さいが、合綴の時に裁ち縮めたものと見える。摺刷は佳良、虫損は少しある。刊記は下卷末裏頁の第七行に「元和三年丁巳孟夏吉日梓焉」とある。さて此の本、初版を版下として冠彫で開版したものである事を、家藏本二部や順宗本との比校によりて確めたのである。上卷首に「三千坊」と云ふ陽刻正方形朱印が存するから便宜上三千坊本と呼ぶのである。

次ぎに順宗本二册は家藏本と同じ大きさで、栗皮色表紙に類した古色ある表紙を有するが、元表紙か何うかを知らぬ。上卷には題簽ありて「下學集」の三字は存し、以下は破れて失せて居る。上卷第二十九丁は落丁し、虫損少しあり、摺刷は家藏本と遜庭無き程度であり、悪い方である。さて此の本で注意すべきは、下卷末の刊記であるが、其の說明は甚だ面倒である。先づ下卷尾四十九丁の裏頁の空白に右寄りに（具體的に云へば、第四行の技字の最左端と、元字の最右端との間隔は九分程である、此の位置は家藏合册本の刊記の位置と同じ）

元和二歲正月二十七日　　海津　順宗（花押）

とあるのだが、是れが木版と墨書との混合であり、其の墨書も二筆以上あるもの、如くであるから面倒である。即ち元和の二字は木版である。しかして歲字以下は墨書にて、順宗二字と花押と（これを便宜上丙と呼ぶ）は薄墨「歲正月二十七日」の六字（これを甲と呼ぶ）はやはり丙と同じ程度の薄墨、先きの禿つた筆で書いた拙字である「海津」二字（乙と呼ぶ）は甲丙に比べるとかなり墨色が濃く、筆跡も確かに、甲丙と異る。しかして此の乙丙は上卷末にも存し、乙の方は「海津西」と成つて居る。

さて是れらの甲乙丙は誰れが書いたかと云ふに、普通には順宗であらうと考へられる。しかし、字體墨色から判斷すると、甲乙丙は三筆であるらしく、乙が最も巧みで、甲は金釘流とも見られるのである。だが乙は、順宗の名の直ぐ上に存する事、及び海津が地名（江）である事を考へると、海津は順宗の住地の說明と見られ、從うて是れを書いたのが順宗であらうが（順宗の異時同筆と見るのである）無からうが、（順宗の後繼者の筆と見るのである）問題とする必要は無いと考へる。さてさうすると、甲と丙との關係が重要となるのだが、此の兩者は、丙の方は先づ普通だが、甲は今云つたやうに金釘式である。しかし丙

は署名であり署名ではどんな拙筆のものでも、一通り見られる程度に書き慣れ得る事を考へ、甲丙の墨色が同一であり、悉筆の程度も一致するやうであるのを見ると、甲丙は同じ順宗が書いたのだと見て支障無いのではあるまいかと思ふのである。（本書二冊には、書皮の當紙（ノノガミ）になほ數筆より成る種々な樂書が存し、皆拙筆であり、其の中に「順宗誓鎭正玄正新正通正吟六代相傳仕候間難所全（オハセ）モノトハ大切（ナキ）致可申候」と云ふ文もある。名から察するに連歌師であるやうにも見える）

さて變なのは、元和二歲の「二」字であるが、是れが奇妙にも、第一畫は明らかに木版であり、第二畫は明らかに墨書である。木版の上をなぞつたのでは無い。しかして其の第一畫は元和二とか元和三とかあつた二若しくは三の第一畫の殘つたものである。

要するに此の一行は刊記と墨書の識語とが混合したもので、恐らくは、刊記が何かの理由で年を示す數字の第一畫以下を失うて居たので、誰かゞ――或いは順宗が――墨書で補ひ足して識語に變へてしまつたものであるらしい。しかして右の如くに解釋する時は、元和二歲正月二十七日と云ふのは、是れを書いた人が本書を入手した時期、又は其れに類するものである可き事は直ぐ想像でき、此の墨書が正しいものとすると、此の順宗本は明らかに元和元年七月十三日此の日改元以後の開版であつて、開版以後僅か半年の間に――實際は刊行年月と、本書の摺刷せられた時日とが判らぬから、半年か五箇月か乃至三三四箇月かは無論判らぬ――此の程度に摩損した事を示して居ると云はなければならず、こゝに下學集の開版を元和三年四月とする從來の說は訂正せられ、或いは元年中の事では無からうかと云ふ疑ひも出るのである。だが果して此の墨書、其のまゝに信じて可いのだらうか。

此の墨書のみを漫然見る時は、つひ信じたくなるが、順宗本と同版の前摺本たる家藏零本に、立派に「元和三年丁巳孟夏吉日梓焉」とあるのを見ると、順宗本の刊記と墨書とに關して、あれこれと臆測をめぐらす必要は雲散霧消してしまふものと思ふ。要するに、自分は、元和版下學集の最初の開版は三年四月であり、順宗本の識語により、元和元年を考へるは正しくないと考へるのである。では此の識語は何う考へたらよいかと云ふならば、自分は大膽に、此の識語は古いものである事は認められるが、記事に僞りが存するのであると云ふ他は無い。恐らく、刊記の所が何故か數字の第二畫以下が失はれて居るやうな後摺本――家藏の本より摺刷がよいと見られるが、實は、家藏本よりは後の摺刷であるものと信ぜられる――を早くとも元和三年四月よりは後に得たものが遊戯氣分から、書き足して元とし たか、又は他の理由で、斯う云ふ事をしたものだらうと思ふ。

四

さて此の順宗本や三千坊本を横山氏より借用した自分は、兩者を比べて、版の異るを知り、且つ順宗本は家藏本二部と同版である事を知つた。つまり、元和三年の刊記ある下學集には二種の版の存する事を初めて知つたのである。斯う云ふ事實を知る事は、下學集を一時に數本見得る人には容易であらうが、自分の如く其れの出來ないものに取りては、かなりに興味ある邊家的發見であつた。斯くて自分は家藏本と三千坊本とを細く比較して、以て家藏本や順宗本の方が初版であり三千坊本が再版本である事を確め得たのである。

以下、其の事を細說するに當り、「家藏本二部につき一言する。一つは合綴本にて、栗皮色表紙はもとのものらしい。摺刷は惡い、「元和三年丁巳孟夏」と云ふ刊記は下卷末空白の中央より少し右寄りに存する。卷頭の白紙に「下學集」と

、意味不明の「吾宗上周志」と云ふ墨書があるので、便宜上吾宗本と呼ばう。も一部は下卷の零本で蟲損はかなりあるが、摺刷は珍しく良い。龜田氏の イに當る本である。「横田」と云ふ一寸四方の陰刻墨印が存するから、便宜上横田本と呼ぶ。

是れらの中、

(甲)順宗本・吾宗本・横田本が同一版で初版であり

(乙)三千坊本が甲本の冠影再版である

と云ふ事に成る。

五

三千坊本で代表せられる乙本が、順宗本の如き甲本に對しては異版の關係にある事は、乙本の底本や本文破壞を說けば直ぐ判る事だから、今わざ〳〵述べるにも及ばないが、事の順序として念の爲めに記すと左の如き相異が存するのである。

上卷

○六丁裏五行の夷字の弓の第三畫のはじめまでが、乙本では尸の形と成つて居る。

○一三表一行の昔字、乙本でははじめの三畫が廿の形である。

○二七裏六行註の或字を乙本は一のある妙な形に作る。

○二八裏六行齊字、乙本には旁の齊の第六七兩畫に當る物が全く無い。

○三一裏一行塢字の巴かしの形である。

下卷

○六表一行註の伎字の第三・四畫が、乙本では中若しくは牛に似た形と成る。

○六表二行養字の第六・七の兩畫、乙本では人の形に續かず、良を除いた所はソ王八を續けた形である。

○六裏六行割註の餘字の旁、乙本では横線が三本ある。

○七裏五行註の竪字の豆を乙本は立に作る。

○八表四行蘂字の下を乙本は二字共巳に作る。

○九表三行惑字の第五・八の兩畫は、乙本では長いノの形として現れて居る。

○同丁六行の省字の小も奇怪な形と成つて居る。

○一〇表二行電字、乙本では一ハ口日を續けてLで貫いた形と成つて居る。

○一〇裏二行割註の燕字、乙本はサョ冊を續けた形に作る。

○一九裏五行註の爆字の旁を乙本は是の下にノ小を書いた字に誤る。

○二〇表六行割註菓字の瓜を乙本はッに作る。

○二六裏二行註、異字の共の縦の二畫が乙本には無い。

○四〇表七行、闕字の最後の欠を、乙本は夕に作る。

○四〇裏六行、古質の訓、甲本はコジッ、乙本はコシヅ。

○四一裏一行、犯字の篇を、乙本はイに作る。

○四三表五行、賃字は乙本で壬は手の形と成り、貝は曰八の形である。

○四三裏三行、爲字、終のmは乙本では一と成る。

斯う云ふ例は夥しい。字形の説明に困るやうな奇妙な形に誤刻して居る例もある。なほ下卷二二表四行割註琴字の下に、甲本には一字分の埋木があるが、乙本は也字に作つて居るのも、兩本間の版木の相異の一つであるかも知れぬ。

六

さて斯う云ふ甲乙兩本は何れが何れを底本として開版せられたかと云ふに、一寸檢して見れば直ぐ知り得る。けだし斯う云ふ冠彫の場合には、やゝもすると誤刻が生じ、殊に底本に缺刻があるとか版の磨損や墨付不良（又其の反對に墨がつき過ぎる場合）で字體が明瞭で無い場合には、特に誤刻が甚しくなるのが普通であるからである。しかして、今甲乙兩本を比べると、此の類の誤刻が乙本に夥しいからである。しかも誤刻は本文の大字にも見えるのだから、字體の小さい割註の文字や、傍訓、捨假名には一層夥しく存するのである。

大字の例では、

○下卷四三表六行、文旨の旨字は乙本では、亡が立と成つて居る。何故斯う成つたか云ふと、甲本では亡が立の形に書かれ居り、且つ此の横の二畫が右の所で接せんとする筆意あり、其れが順宗本や吾宗本の如き摺刷の惡い本では、接觸した形と成り、いかにも立の形に見られぬ事も無い、そこで、立字と紛ふ甲本の旨と、完全に立字に作る乙本の旨とを並べて見ると、甲本が先きに出來、それを底本として冠彫する時に、亡を立に誤刻し

たのだと云ふ事は直ぐ見極めがつくのである。しかして甲本でも横田本のやうに摺刷の佳良なものでは、上の形がはつきりして居るから、是れを底本とした場合に立と成るとは認められぬ。甲本の中でも後摺なの悪いもの底本としたのである事は容易に考へ得る。

○上二五表六行、幾字の田を乙本は田の十字の縦畫が交叉點以下を失うた形の形に誤刻して居るが、是れは甲本でも缺けて居るから、馬鹿正直に彫つたのである。

○上一九表四行、采女正の采字、甲本では彡の所が、やゝこしく、其の爲め、采字が宋字とも見える形であるが、乙本は完全に宋字に作つて居る。

○下一〇表三行、息災の災字を乙本は笑字に作る（尤も天の丿は無し）これは災が、摺の佳良なものに於いても多少はつきりせず、後摺ではいよ〳〵不明瞭であるからである。

○下二〇表五行脚蹈の蹈字の旁の臼を乙本は田に作るが、これは甲本が×（右に日左に一）の形に作り乍ら、後摺本では、其れが何故か田の形に見えるのに誤られたのである。

○下卷八裏五行、稽字の右肩は尤の形だが、乙本では九の右肩に一點を添へた形である、是れは、甲本では横田本で見れば判る通りまさしく尤の形に彫つたのだが、第一畫の尾と第三畫の首とが接着して居るため九と見られ易い形と成り、後摺本では一層九に近く成つて居るので、乙本が完全に九の形にしてしまつたのである。

割註の漢字で云へば、

○上卷卅丁表六行、行頭の字は、甲本は勇、乙本は男である。何故斯かる相異が生じたかと云ふに、甲本では其

の勇字のマが殆んど不明と成つて居る爲め、冠彫の彫刻者は、其れをマの名殘であるとは氣付かず、汚點であるとでも考へ、從つて勇を男に誤刻したものだと云ふ想像がつく。

○上卷三〇丁裏七行、脣字の割註に、甲本は與ヒ唇同字とあるが、其の唇字が乙本では尸の下に目を書いた字に誤つて居る。蓋し甲本で唇字の第五畫の撥畫が無く、少し變な形と成つて居るため、乙本が誤刻したのであり、兩者を比べると、成程と誤刻關係が首肯できるのである。

假名の例としては

○上卷三丁表四行哉字のカナが乙本ではカイと成つて居る。これは甲本でナの二畫の交叉角が直角に遠い形と成り如何にもイと見られ易い形と成つて居るからである。

○下卷四九裏三行、奇怪の音註キクワイを乙本はキタクイと云ふのに誤るが、これも甲本と乙本とを比べて見ると、いかにもと首肯できる。

七

さて斯う云ふ例を左に列擧する。しかし決してこれが全部では無い。漢字の誤刻よりも假名の方を主として擧げる。われ〳〵は國語辭書として下學集に對するものであるが故である。

漢字の誤刻例

上卷

○三〇ォ裏の人頁外が草冠に任組上部六畫を書いた形となる。

○二六註〇オ弓削の削の第三畫までが十の形となる。
○三註〇ウ峨字を變な形に誤る。
○二〇ウ四註州字の三點を一線に作る。
○二一オ滿字を誤刻す。
○二二オ註醫の第七畫までがス大Lを合した形と成る。
○二三オ四註涼が广の中に京を書いた形と成る。
○二四オ五註旻の四を回に誤る。
○同　絜を穴の下に糸を書いた字に誤る。極端な例の一つ。
○二五ウ一註の翅字も誤刻せらる。
○二七オ一註ヤマシギの訓ある二字の上字は龍を篇とし鳥を旁とした字であるが、乙本では其の龍が似て非なる形と成つて居る。
○二七ウ二註窪字の足をロユの形に誤る。
○二七ウ六註竹字を々を篇とし于但し一・二畫は續く を旁とした字に作る。珍しい例。
○三オ三乳房の房字の戸を乙本がまさしく戸の形に刻するは甲本で缺畫あるからである。
○三一オ五膝字の旁の第二畫と第七・八の兩畫とがつゞいて、まさしく夾の形と成つて居る。

○七オ四註　晨を、乙本似て非なる字に作る。
○八ウ三註　暗字を月篇に作る。
○一〇ウ一註　起字の篇を變な形に作る。
○二〇ウ二註　壁字の辛をナキを縱に續けた形に誤る。
○二〇ウ六註　鰈の旁を世不の形に作る。
○二四ウ七註　案を說明不能の形に作る。極端な例。
○二五ウ六　毛錐子の子字の第一畫に輪を作つて居る。
○二六ウ四註　蒼の今のテを三の形に作る。
○二七オ三註　原字を似て非なる形とす。
○三一ウ五註　宋字を東字の第一畫の足らぬ形とす。
○三一ウ六註　聖の壬を手に作る、蓋し連續符を見誤つたからである。
○三一ウ一　練の旁を束に作る。

假名の誤訓例（下段は甲本の文字）

上卷

○三一オ　爰の訓ミニ　　ユ、ニ　俱しユに缺畫ありてニとも見らるゝ故
○三一ウ　百の訓ヤト、　　コト、　何れコに缺畫ありてニ形と見えるる故

○七ウ四註 無双の調　グサウ　ゾサウ
○一六オ四註 流の調ナアレ　ナカレ但しアトも見える形
○一九ウ四註 郡の調ロフリ　コフリ
○一九ウ三註 恕の調ジョケリ　ジョナリ
○二〇ウ一註 往の調ケイテ　ユイテ
○二五オ 檜皮葺の調ヒワクブキ　ヒワタブキ
○二五ウ七註 縦の調ソメトニ　タトヒ但しヒに缺畫あり
○二七ウ五註 在の調ヲイナ　ヲイテ
○二八ウ三 鯰の調アソ　アメ
○二八ウ五註 海貝の調アリヒ　アワヒ
○三〇オ一註 弄の調リメ　ーメ—は弄の字音を註するのを略した事を示す記號、メはシテ
○三一オ二 胞×ずの下の魚の調マキビ　ニキビ

下卷

○四ウ七 犬追物の調イメヲモノ　イヌヲモノ但しヌはメに近い形
○五ウ四註 煩の調ワツフイ　ワツライ
○一〇ウ五 地頭の調チトラ　チトウ但しウはラと見られやすい形

○七・一ウ　煙煤掃の左傍調スヽハテ　スヽハキ
○一・一ウ　上書の調ウヽクカキ　但し鈌畫あり　ウワカキ
○三・一オ　臣等言の調ニクラコトバ　マクラコトバ
○一・四ウ　謂の捨假名ヲ　フ
○四・五オ　喻の調メトフ　タトフ
○一五ウ二　索麵の調サラメン　サウメン
○四・一五ウ　腎の調ヒンメ　ヒシヲ　但しヲに鈌畫ありナの如し
○六・六ウ　視の調イワラ　イワウ
○五・七オ　丘の音註チウ　キウ
○七・一七オ　喉の調ニナジリ　マナジリ
○一・二一ウ　吹の捨假名ノ　但し横田本にも鈌畫ありノに似た形なり
○二・二ウ　盛の調ナカンニ　サカンニ
○四・二四オ　車の調クルニ　クルマ
○六・二五オ　坐の調ザセシハ　ザセシム
○五・二六ウ　註ミツカフ　ミツカラ
○四・二七ウ　朔の調ツイスチ　ツイタチ

○二七オ六註 誤の訓アヤニク　アヤマリ
○二七オ五註 落の訓ラトス　ヲトス
○二七ウ四註 綻の訓キコロビン　ホコロビン
○二七ウ五註 衞の訓ニ大ル　マホル
○二八オ二註 堆の訓ウヅメフセント　ウヅタカフセントレ
○二八オ三註 英辭の間の雁點ン　ノメハ
○三オ五註 欲の訓タハ　カタチ
○三九オ四註 形の訓カタチ　カイエキ
○四〇オ四註 改易の音註カイシキ　ヲルヿヲ
○四〇ウ四註 居の訓ヲハヿリ　イフコヽロハ
○同　言の訓イフコヽヒハ　カシコタシテ
○同　賢の訓カンコタシテ　ブジツ
○四二ウ一 無實の音ブジヲ　ヲヽウ
○四四オ一註 覆の訓　トヽメテ
○四四オ三註 停の訓ヒメテ　ナラン
○四四オ六註 惡の訓トラン

○四五ウ三奇怪の音キタクイ　キクワイ
○四六オ二註推の訓ウシ　ヲシ
○四六オ三註鞘の訓　サヤ
○四八オ一旁は袞×篇は由の音リウ　ソウ
○四八オ四貽の音ナ　イ
○同旁は衰篇は木の訓ムトキ　ムナキ
○四八オ七綆の訓ツルヘナウ　ツルヘナワ
○四九オ一竹の下に早の訓ウチ　ウケ
○四九オ五筍の訓タアンナ　タカンナ
○四九オ七脛の音イイ　ケイ
○四九ウ一朋の音ホワ　ホウ
○同　滿の訓ヨッ　ミツ

以上擧ぐる例により、乙本が甲本の再刻本である事、再刻本は本文を破壞する事夥しくして、本文としては甲本より劣る事が明らかである。因みに云ふ、日本文學大辭典の下學集の條に出て居る元和版の寫眞は、小さいので特徴がはつきりせぬが、再刻本の方であると認められる。又、龍谷大學圖書館にも一本があり、昭和四年頃標本として卷尾の數丁を陽畫感光寫眞にした是えがあるので其れを取り出したところ初刻本であり、刊記や位置は家藏横田本と同じで

ある事を知つた。さて龍大で今は準貴重書に成り居る該書を調査したが上巻首下巻首に寫字臺之藏書印と云ふ楕圓形陽刻朱印のある一册本で（合册者は後人である事は虫損の不連續でわかる。裁縮もある。）小虫はあるが摺の甚だ良好な本である。ところで龍大にはも一部下學集元和版のあるのを知りて出して貰つたら、例の寫字臺の藏本で（藏印は初刻本と同じ）一册本だが（これも虫損が上巻尾と下巻首とで連續せぬから後人の合册である）これは案外にもまさしく再刻本であつた。摺も佳いさて此の二册、共に寫字臺（夷方用の文庫であつた由）から圖書館へ移されたのであり、兩本の舊番號（龍大圖書館圖書としては其の後變更せらるは 4 20・4 19）と連續して居るから、昭和四五年頃も此の兩本は圖書館に存した筈にて、よく査べさへすれば兩本の相異はすでに昭和四五年頃に容易に氣つく事出來た筈だのに、案外にも肝心に氣づかなかつたのである。兩本を同時に借り出し乍ら版種の別に氣づかなかつたのか、氣づいても輕視したのか、慚愧に思ふと同時に異版研究の難しさをも考へる。

八

元和版には、其の初版にも誤刻による誤謬がまゝ存する。其れらの中、漢字の形の一寸した相異や、片假名の中ラヲ、アヤ、ウラの別の明確で無いもの、例へば男神（上五ウ）道（上一二ウ）儺（上二オ）御菅司（上一五ウ）、又清濁の誤、例へば疑をウダカフ（下四七ウ）巾子をゴシ（下二〇ウ五）と訓む如きは除き、誤刻の著しいと見られるものを擧げると左の如くに存する。

上巻 ○八ウ六（注）春日の日が日と成る。

○八ウ七 坤軸の訓 コンヂタ

○一七オ一 椎をキコリと訓で居るが、椎は然う訓めさうに無い、樵の刻火が落ちたのではあるまいか。是れは版下原稿の誤かも知れない、さうすると誤刻とは云へなくなる。

○一八オ五主計頭の註に度支節（但し節字竹冠で無く一寸判りにくい形）とあるは度支郎の誤、但しこれも原稿の誤か。

○二〇オ一註末流は末流とある可きもの。

○二六ウ二註刻鳥の音レウはレッの誤。

○二七オ三註夜字の下の×（旁ほ見篇ほ力）は視字の誤刻と信ぜられる、ネの第三畫までが原稿の字體に誤られて力に似た形と成り、最後の點は見の第五畫の中に入り込んだものらしい。或ひは又ネの行體（三畫で書き得る、例ば上卷一丁裏三行註にある）が力と成つたものかも知れぬ。

○二九ウ一註守宮の音シユダウ

○三ウ一越訴の音ヲソソ

下卷

○三ウ一雅意の音ガイイ。イは一字不要だ。

○一〇ウ六暖寮の音ノシリヤウ。ノンとある可きもの。

○一七オ四註鋸刀彫反也。まさしく刀とあるが、無論力の誤である。

○四九オ二眼の訓メル。これはノルとある可きもの、但し、若し罵詈を活用させたメルと云ふ語があつたとすれば（例へば料理から出たレウルの如し）誤刻では無くなる。

なほ版下の誤と信ぜられるものも存するが、其れらの事や、下學集全般に關する事などは、他日に讓る事とし、今は、唯一版であると考へられて居た元和三年版には寛彫再刻本がある事の紹介のみを述べた次第である。

（昭和十三年三月二十四日稿又後補）